CORE Metadata, citation and similar papers at core.ac.uk

【資　　料】

基礎看護学実習Ⅰの学習効果の検討
―学びのレポートおよび学生自己評価結果から―

山口佳子*　吉田理恵*　山本美紀*　種本純一*　山川京子*

【要　　旨】

本学では平成28年度より、入学早期に健康な対象者とのコミュニケーションを通した人間関係の構築が図れることを目的とし「基礎看護学実習Ⅰ」を実施している。本報告は、その学習効果を、学生の自己評価、および学びのレポートから評価し、実習指導および運営の在り方について示唆を得るものである。

アンケート調査では102名（回収率93.6％）の回答があり、レポートについては104名の協力が得られた。全ての目標に対して、「よくできた」「まあまあできた」を合わせた回答が90％以上であった。学びのレポートでは、実習目標の対象者への自己紹介およびコミュニケーション技法を用いた体験、自己のコミュニケーションの振り返りを通した自分の特徴および今後の課題の明確化に関する記述が多かった。異世代と関わる機会が少なく、コミュニケーション体験が少ないこれまでの環境で、日常あまり接したことのない対象との交流や、様々な体験を意欲的にできた満足感や達成感が高評価に繋がったことが伺われた。また、健康障害のある対象との関わりの難しさを予測し、コミュニケーションの重要性や看護職としての適応性についてを考える記述もあった。しかし、実習目標のコミュニケーション概念などの理解や、教員とのコミュニケーション（報告・連絡・相談）に関する学びの記述は少なく、実習目標設定および内容の検討の必要性が示唆された。

【キーワード】看護基礎教育、早期体験実習、コミュニケーション

Ⅰ．序　　論

大学における初年次教育は、高校から大学への移行という青年期にとって重要な転換期を支援する教育として定義され2008年３月中央教育審議会では学士課程教育のなか、初年次教育を明確に位置づけることが提言された。これらの背景には、①学生の変容、②大学をより教育重視する場へと変革させる政策、③社会から求められる教育効果の提示が報告されている（山田，2009）。

学生の変容について、対人関係において聞くことはできるが話すことが苦手であり、相手の顔色を見ながら聞く傾向や、自己表現に消極的である大学生のコミュニケーションを通した対人関係の有り様が報告されている（栗田，内野，小島，岡本，磯部，三宅ら，2012）。

コミュニケーションは、社会生活を営むうえで人間が互いに意思・感情・知識・考えなどを伝達し、理解し合うために必要な行為である。特に看護実践では、患者とコミュニケーションをとり、患者の反応を適確に情報収集し判断することが日常的に求められる。そのため、コミュニケーション能力の何如によっては、適切な看護実践が行われかねないといえる。

昨今の生活環境の変化では、特にソーシャルネットワークが広がり、コミュニケーションの３割にも満たないといわれる言語的コミュニケーションを主に用いて会話し、対峙して自身の五感を使って読み取らなければならない非言語的コミュニケーションはほとんど用いられていない現状が見受けられる。

実際に看護学実習においても、臨床スタッフより、本学学生のコミュニケーションについて、ベッドサイドでただじっと立っている、理解できたかどうか

＊日本赤十字北海道看護大学

（2018.11.30受理）

反応がないなど、指摘されることが少なくない。

これらの状況をふまえて、健康障害のある人との関わり以前に、健康な対象者とのコミュニケーションを通した人間関係の構築を図れるよう、平成28年度より基礎看護学実習Ⅰに「地域に暮らす健康な人々とのコミュニケーション体験」を位置づけた。本研究では基礎看護学実習Ⅰの学生の自己評価、および学びのレポート結果から、基礎看護学実習Ⅰにおける学習効果を評価し、基礎看護学実習Ⅰにおける指導および運営の示唆を得るものである。

Ⅱ．基礎看護学実習Ⅰの概要

本学の基礎看護学実習Ⅰは１年次前期の必修科目（１単位15時間）で、平成28年度は７月４日～８日に実施された。実習の目的・目標は表１に示した。

表１　実習目的・目標

目的

地域に暮らす健康な人々とのコミュニケーションを通して、人間や社会への関心をもち、看護に必要となるコミュニケーションの基本的技術を習得する。さらに、実習での体験を今後に学習に役立てる。

目標

１．コミュニケーションに関する過去の体験を振り返り、コミュニケーションの概念、種類、構成要素、過程を理解する。
　１）自己の体験を言語化できる。
　２）コミュニケーションに関する知識を活用できる。
２．対象者に自己紹介をし、コミュニケーション技法を用いた体験ができる。
　１）体験した場面を具体的に記述できる。
　２）体験した場面から自分のコミュニケーションの特徴や学びを記述できる。
　３）記録内容は適切な文章構成ができており、誤字脱字がない。
３．教員との適切なコミュニケーション（報告・連絡・相談）がとれる。
４．自己のコミュニケーションの振り返りを通して、自分の特徴を知り自らの目標と今後の課題を明らかにする。
　１）実習での学びを体験から具体的に記述できる。
　２）コミュニケーションにおける自己の特徴を記述できる。
　３）コミュニケーションに関する目標と今後の課題が記述できる。
　４）レポートは形式に沿っており、誤字・脱字がない。

実習は１グループ６～７名の16グループに分かれて、表２・３に示した実習方法にて展開し、評価した。また、教員１名が１グループを担当し、学内における指導、現地実習へのラウンド、実習に関する学生からの報告・連絡・相談について対応した。

さらに学内のグループ学習では、実習場所および交通機関などの確認を含めた実習計画の立案や行事・サークル活動内容、高齢者クラブ・高齢者大学の成り立ち、高齢者の特徴およびコミュニケーションなどについての学習および共有を促した。

表２　実習方法

学内準備学習（１日目）
・事前課題のコミュニケーションに関する過去の体験をグループ内で発表、共有する。
・既習のコミュニケーションの概念や種類、文献をとおして、グループでコミュニケーションについての理解を深める。
※グループでの討議内容は書記役割が記録し、担当教員に次日に提出する。

コミュニケーション実習（２～４日目）
・実習場所・日程
　高齢者クラブ２日間　　高齢者大学１日間
・実習内容
　囲碁・カラオケ・ダンス、茶話会などのサークル活動、運動会・講話会・絵手紙・軽スポーツ学習会などの行事に見学・参加しながら対象者と積極的にコミュニケーションを行う。
　実施したコミュニケーション体験の振り返りをグループで行う。
　その後、学内にてグループでコミュニケーション体験の振り返り、各担当教員へ報告。次日に向けて、事前学習や準備を行う。

学内まとめ・全体発表会（５日目）
・グループでコミュニケーション実習における学びを言語化し、全体発表会に向けて整理する。
・全体発表会での学びを共有する。
　１グループ発表時間５分、資料（A4用紙もしくは模造紙１枚）作成する。

実習記録
・コミュニケーション体験記録
　コミュニケーション技法を用いた体験内容から、気になった場面（１場面）を具体的に記載し、場面における自分の言動を客観的に振り返る。
・課題レポート
　テーマ　「体験をとおして学んだこと」
　　3000字以上で①～③の内容でまとめる。
　　①実習での学び
　　②コミュニケーションにおける自分の傾向
　　③コミュニケーションについての自分の目標と今後の課題

表３　実習評価

実習目標達成状況80％、実習態度20％により評価する。
実習態度は以下の４つの項目で行う。
１．グループ討議で、自己の体験や意見を積極的に伝え、グループメンバーの意見を聞くことができる。
２．グループでの学びをまとめ、積極的に発表会に参加できる。
３．適切な挨拶・言葉遣い、身だしなみ、対象を尊重した態度で行動できる。
４．遅刻および欠席なく実習に臨むことができる。

Ⅲ．研究方法

１．対象

平成28年度基礎看護学実習Ⅰを履修した１年生109名および、平成28年度基礎看護学実習Ⅰの実習終了後提出したレポートとした。

２．データ収集方法

１）基礎看護学実習Ⅰの目標に準じた自作のアンケート

項目は４つの実習目標に対し、良くできたを４とし、全くできなかった１のリッカート尺度を用いて、無記名自記式質問紙法を実施した。

２）基礎看護学実習Ⅰ終了後の「体験を通して学んだこと」のレポート

アンケート調査と合わせて、実習終了後に口頭と書面にて研究の趣旨について説明し協力を依頼した。

３．分析方法

１）基礎看護学実習Ⅰの目標に準じた自作のアンケート

項目ごとに単純集計した。

２）基礎看護学実習Ⅰ終了後の「体験を通して学んだこと」のレポート

レポートを全体の意味が判かるまで読んだ後、基礎看護学実習Ⅰの４つの目標に対する学びに関連する内容を、文脈の前後の意味を読み取り、文脈の意味を崩さないように抽出し、簡潔な一文にして記述データとした。それらについて研究者間の合意が得られるまで繰り返し相違性、共通性を検討し、意味の類似するものをまとめた。

４．倫理的配慮

実習終了後、研究の目的と方法、研究の意義や調査内容、回収方法、回収データの保管方法、研究への参加の自由、研究参加は任意であり回収箱へ投函されたアンケートおよびレポートに関する同意書をもって同意と判断すること、研究への不参加による不利益を被ることはなく、成績には一切関係がないこと、倫理性の審査、調査結果の公表について口頭および研究依頼文書にて説明した。また、レポートは同意後も辞退することは自由であることを説明し、同意書と一緒に同意取り消し書を配付した。実習後のレポートの分析については、成績が確定した後に実施した。

尚、本研究は日本赤十字北海道看護大学研究倫理委員会の審査・承認（承認番号28-258）を得て実施した。

Ⅳ．結　　果

１．基礎看護学実習Ⅰの目標に準じた自作のアンケート

対象109名のうち102名分を（回収率93.6％、有効回答率100％）対象とした。

実習目標１「コミュニケーションに関する過去の体験を振り返り、コミュニケーションの概念、種類、構成要素、過程を理解する。」では、「よくできた」28名（27.5％）「まあまあできた」69名（67.6％）「あまりできなかった」５名（4.9％）「全くできなかった」０名（０％）であった。

実習目標２「対象者に自己紹介をし、コミュニケーション技法を用いた体験ができる。」では、「よくできた」38名（37.3％）「まあまあできた」54名（52.9％）「あまりできなかった」９名（8.8％）「全くできなかった」０名（０％）であった。

実習目標３「教員と適切なコミュニケーションがとれる（報告・連絡・相談）。」では、「よくできた」45名（44.1％）「まあまあできた」52名（51.0％）「あまりできなかった」５名（4.9％）「全くできなかった」０名（０％）であった。

実習目標４「自己のコミュニケーションの振り返りを通して、自分の特徴を知り、自らの目標と今後の課題を明らかにする。」では、「よくできた」46名（45.1％）「まあまあできた」56名（54.9％）「あまりできなかった」「全くできなかった」０名（０％）であった。

いずれの実習目標においても、「よくできた」「まあまあできた」を合わせた回答が90％以上（91.2～100％）であった（図１）。

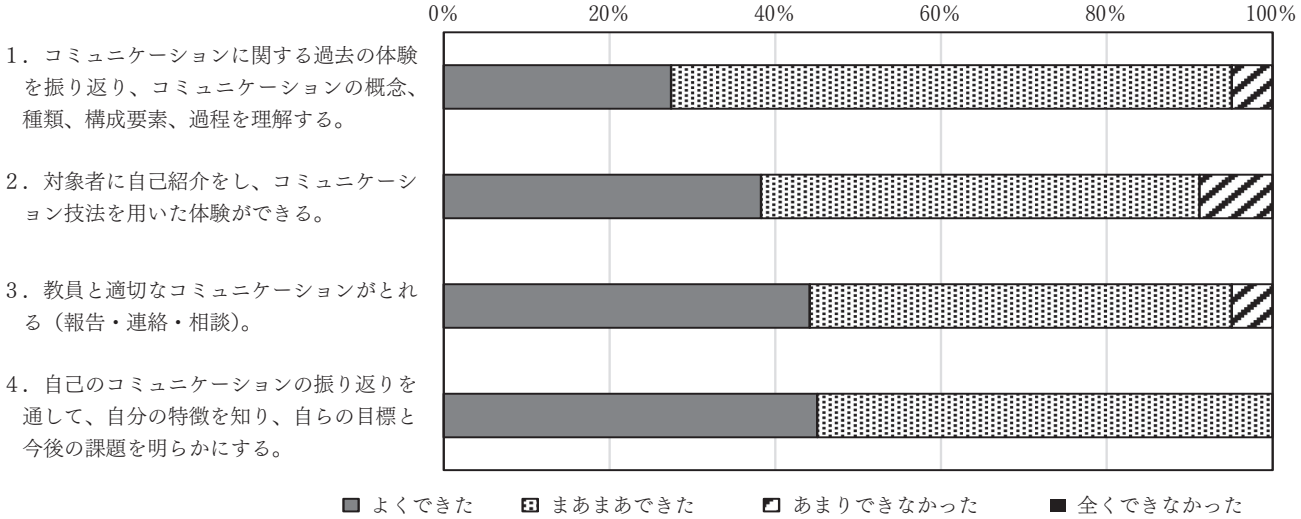

図１．基礎看護学実習Ⅰの目標に準じた自作のアンケート結果

２．基礎看護学実習Ⅰ終了後の「体験を通して学んだこと」のレポート

レポートについては、104名の協力が得られた。レポート記述では、実習目標２「対象者に自己紹介をし、コミュニケーション技法を用いた体験ができる」、実習目標４「自己のコミュニケーションの振り返りを通して自分の特徴を知り、自らの目標と今後の課題を明らかにする」に関する記述が多かった。既習の知識であるノンバーバルコミュニケーションの有用性やコミュニケーションにおけるスキルについて、五感を通した実体験による学びをコミュニケーションの取り方、その場面での感情や行動を本来あるべきコミュニケーション方法とともに振り返る内容が多くみられた。また、自己のコミュニケーションを振り返り、今まで気づいていなかった自分の傾向を知り、看護職としての資質にむけた自己の課題を見出す示唆を得ている様子も覗えた。

実習目標１「コミュニケーションに関する過去の体験を振り返り、コミュニケーションの概念、種類、構成要素、過程を理解する。」、実習目標３「教員と適切なコミュニケーションがとれる（報告・連絡・相談）。」に関する記述は多くはなかったが、過去の体験を既習の知識と結びつけて振り返る内容や、教員への報告・連絡・相談の体験から得た成果とその有用性が記述されていた。

Ⅴ．基礎看護学実習Ⅰの学習効果の検討および今後の課題

学生は基礎看護学実習Ⅰを通して、看護職として様々な背景の対象と関わるために必要なコミュニケーションについて多くを学び、学習効果を得ている事がわかった。

基礎看護学実習Ⅰの目標に準じた自作のアンケート結果では、全ての実習目標に対し、90％以上が「よくできた」、「まあまあできた」と評価をしている。筆者らは、実習施設をラウンドしているが、学生からは終始愉しそうな様子が見受けられた。先行研究で「実際に見た現象と知識が結びつくことで、学ぶ楽しさを感じていた。」と報告がある（伊藤，中岡，岡崎，岩永，2009，p.71）。異世代と関わる機会が少なく、コミュニケーション体験が少ないこれまでの環境に対し、実習では意欲的に日常あまり接したことのない対象との交流し、様々な体験ができた満足感や達成感が高評価に繋がったことが伺える。本報告と、実習場所は異なるが、病院での実習において神庭，松下，藤生（2008）も同様の報告をしている。

レポートでも、実習目標２「対象者に自己紹介をし、コミュニケーション技法を用いた体験ができる」に関する学びを多く記述していた。多くの先行研究と同様、学生は実習体験によりコミュニケーションの大切さ、難しさ、対象に合わせた関わり方を体験を通して学んでいた（神庭ら，2008；皆川，北村，三浦，世古，倉田，三吉ら，2006；相原，勝山，渡邊，神里，遠藤，樋口ら，2005）。さらに、目標４「自己のコミュニケーションの振り返りを通して自分の特徴を知り、自らの目標と今後の課題を明らかにする」に関する学びの記述が多かった。学生は自己のコミュニケーションを振り返り、コミュニケーション技術の活用不足・困難さなど、今まで気づいてい

なかった自分の傾向に気づいていた。実習におけるコミュニケーションに関する質的研究で、コミュニケーション不成立の要因の１つとして、「緊張や、知識がなく自分に自信が持てなかった。」「話題がすぐに見つからなかった。」などの報告がある（岩脇，滝下，山本，松岡，西田，2001；岩脇，滝下，松岡，2003）。学生は日常、あまり接することのない年代の対象との関わりを通し、今後、看護職として様々な背景の対象と関わることの難しさを認識し、コミュニケーションが重要であることを認識したことが、看護職を目指す自分の適応性について考えられたことに繋がったのでがないかと考える。

基礎看護学実習Ｉのコミュニケーション体験による満足感や達成感、自己のコミュニケーションついての学び・気づきが、今後のコミュニケーション能力の向上につながるような、継続した教育内容についても検討することが必要である。

一方、実習目標１「コミュニケーションに関する過去の体験を振り返り、コミュニケーションの概念、種類、構成要素、過程を理解する。」、実習目標３「教員と適切なコミュニケーションがとれる（報告・連絡・相談）。」に関しては、90％以上の学生が「よくできた」、「まあまあできた」と評価したにもかかわらず、学びの記述は少なかった。実習１日目の学内学習では、実習目標１と結びつけて、各自がコミュニケーションが上手くいかなかった場面の記述を事前課題として持ち寄り、グループでディスカッションする。それと合わせ、文献などを利用し、既習のコミュニケーションに関する知識を想起させ、コミュニケーション理解を促している。実習では、実習場所での体験がのみが強く認識され、実習目標と学内実習との結びつきが弱くなったとも推測される。また、学生が主体となって実習場所に出向いたり、学生間での討議が主となるため、総体的に教員との関わりが少なく、教員とのコミュニケーション場面がなかったとも考えられる。入学早期の学生が実習目標を理解し、自己評価および成果の言語化をしていくためには、教員の適切な関わりが不可欠である。現時点の学生にとって、実習目標や実習内容が適当であるか検討するとともに、教員の指導方法についても検討の必要性があると示唆された。

今回の研究を通し、学生のレポートは文章の意味内容がわかりづらい表現が非常に多かった。文章課題の提出において、「個々の学生の能力格差は大きく読解力と表現力が不足している学生が少なくない。」（杉野，新山，2012，p.5）ことが指摘されおり、また以前より、日本の学生の国語力低下について様々な議論において、文章能力の低下を懸念する報告がされている（教育長協議会，2002）。文章を書くこともコミュニケーションの１つであり、思考を言語化することのトレーニングもまた必要であることが示唆された。

Ⅵ．引用文献・参考文献

相原優子，勝山貴美子，渡邊順子，神里みどり，遠藤淑美，樋口香織，新實夕香理，藤井徹也，河津芳子（2006）．看護学生が捉えた早期体験実習における体験の意味．日本看護医療学会雑誌，８（２），33-43.

飯塚一裕（2010）．大学生のコミュニケーション意識について－テキストマイニングによる分析－，愛知教育大学研究報告59（教育科学編），49-53.

伊藤朗子，中岡亜希子，岡崎寿美子，岩永真由美（2009）．早期体験実習の評価と学生の学びに関する基礎的検討，千里金襴大学紀要，63-72.

岩脇陽子，滝下幸栄，山本容子，松岡知子，西田直子（2001）．臨地実習におけるコミュニケーション技術に関する研究―基礎看護実習における１年次の実習状況，京都府立医科大学医療技術短期大学部紀要，11（１），53-56.

岩脇陽子，滝下幸栄，松岡知子，（2003）．臨地実習におけるコミュニケーション技術に関する研究－基礎看護実習における２年次の実習状況－，京都府立医科大学医療技術短期大学部紀要，12（２），111-120.

神庭純子，松下延子，藤生君江（2008）．４年制看護基礎教育過程の１年次「ふれあい実習」の教育効果（第１報），岐阜医療科学大学紀要２号，107-114.

栗田智未，内野悌司，小島奈々恵，岡本百合，磯部典子，三宅典恵，仙谷倫子，林マサ子，弘津由，二本松美里，吉原正治（2012）．大学生のコミュニケーション行動と意識の調査－コミュニケーションの自己評価を中心に－．広島大学保健管理センター研究論文集，28，43-49.

教育長協議会（2006）．教育長協議会の研究報告（１）国語力の向上，内外教育（5663），時事通信社，2-3.

皆川敦子，北村眞弓，三浦陽子，世古留美，倉田亮

子，三吉友美子，福田峰子，藤原郁，船橋香緒里，栃本千鶴，前野育子，足立はるゑ（2006）．早期体験実習後におけるレポートからの分析．日本看護医療学会雑誌，８（２），33-43.

奈良知子（2009）．看護学生のコミュニケーション技術教育の効果と問題点，弘前医療福祉大学，１（１），59-66.

杉野美礼，新山悦子（2012）．基礎看護学実習Ⅰを終えた学生の他者への感謝の気持ち，四国大学紀要，(B) 35，1-6.

田中聡美，林圭子，伊藤尚子，関洋美（2012）．看護学生の早期体験実習における経験の内容に関する基礎的検討－正統的周辺参加論の援用から－，東北文化学園大学看護学科紀要，２（１），27-35.

山田礼子（2009）．初年次教育とは何か．看護教育，50（５），376-381.

矢崎裕美子，高村秀史（2014）．「コミュニケーション力」を伸ばすための授業実践と学生の自己評価，日本福祉大学全学教育センター紀要，２，29-39.